



特 別
5
6552



瓢箪集序

人生る事七十古事稀を架
 宋屋叟と予共四十年風雅乃友
 友より移をかめくかきわ其餘を
 新子海起も初よりこれあつたり
 後初乃争い此もあつたり
 孝に孫を紹き入る事実に漸花空

志く又まの何なり結核よおまほゆゑに
ほくく志屈乃故もやあんゆ又没
しつすくす甲の勢其流津字
主人甚稿をささくひくばくの初編
あつもの以選み出し様に強人とい
予その志乃る厚き感下と交り此
久したもさく為に序しつこれ故
ひろむ新筆年其甚居世用いん歌
号心とさるなる人し一叟を句連志
いしつ教万のけああれお繕ひて
二篇三篇結出たん事す楽し
かゝ書や吟吟いさうたんく果類人
あつう那あひ張果郎の新筆を
出せる駒を何より用いんいさうをん

志平此月花之永く世に傳ふ
 朽きく為す蠅拂ひを斜に
 へく日善哉々々瓢箪集辨道吐
 其又曰萍身主人是瓢箪先生
 之千里駒唱

明和六歲丑五月上浣



西山隱士雅因

西
 山
 隱
 士
 雅
 因

貪財無貯
好色不著
身世一瓢
豈任哀樂

嘯山謹題



善村寫



瓢箪集初編

平安 望月宋屋著

春部

歲首

初而平 拙中 月引 日枝の影
 此の心は 望月を以て 花は 春
 樂の心は 流るる水 ありて

夢遊草花れかきつとすくさや泉 朔
菟角一とくを成りり 門乃松
門杏や我 表へ乃 ちまき草よ
奥のれは 柳二とを我 柳てさるる
柳の 柳年をさすへと
思さば 腕と心と 宿の妻

梅

難色れを年ハ多れとくうめの花
は此草花の 名を 類也や梅れを

ゆきをさすうめあふれや 乃 乃 乃
水高や 野候の梅れ 右 花 花
梅咲をさ 梅乃 乃 乃 乃 乃 乃
菟陰の風を 梅乃 乃 乃 乃 乃 乃
編草ハ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 梅れ 梅も 白く 乃 乃 乃 乃
紅草や 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

柳

春柳をこゝろへて去し馬のつ
る乃屋の柳の風やと出川
春の川に流るる水は春の柳に

初年

初年や白田元ゆくあま師

初年や常盤もかへし海客の郵

春の

春の雨や蒲田の風を常盤の子

春の雨や待も惜しもある山

蝶

春の采種又多く蝶れり唐の鳥

日かき守り蝶は遊やと花乃と産

春の鳥ははらへてそれし時

花の雨の蝶や春の院をこ

春の鳥は通ひのよや花の鳥

春の鳥は通ひのよや花の鳥

白魚の孔のついでに遊ぐぬ京の水
拙者の心を温めよやす廣く
身張るふらふで入りぬ夕を産
わの若も此正しく居るの明
春の望やまぬ男小信の渾

梅

見るに及ぶ事なき思ふ梅の
る此日やさくは事なき言ふは

方丈へ去るぬ人ゆくさくら

臨川寺

水溜り松と梅もゆきふらり

嵐山

細寺や志まゆまき一女子
花のまに戸無風汲とら那風は
川の上は何を吹くもこれ波
花筒乃青侍や葉地は内

遊日

日下をりし柳花草花の白

子園母七千か美

喜良に福しそ阿多れ菊花苗

時海無母七十宵

斗擗負松花影をる子穂下

山吹や雪を不非人ちりし一四云

夏部

文衣

人れ氣不風也通ひてこ後も更

森所へ袷をいふ能はる事

牡丹

花の後そふゆらるるほそん人

見ゆ人乃身介拱くや牡丹畑

時鳥

恋わらばる者ふそらぬりて
杜宇すまひや 常風のあせらるる
けしきす 顔くさる 春の雨
降にもるぬれぬ 宿のしほ
明すや ちかす ちかすのしほ
夜盗すも天乃とや 郭公
下宮くしと 倉のけしき

田植

白鷺も秋をまうけ 田植の
若くはあはれ 田植の南

松江よりあふ

候あはれ 田植のあはれ

夢

道つとて 要れば 夢の
飛下つて 春まつ 夢の

田植く 出せぬ 夢

棚橋の怪我ありぬ管此を

五月日

此の所の名をいふ所ありり五月日
五月日午時と云ふは此の所の
は川を隔ててあり

此の所の名をいふ所ありり

川を隔ててありぬ管此を
能橋や人に抱つてありぬ川

五月日午時と云ふは此の所の

るは此の所の名をいふ所ありり

日盛る午一時と云ふは此の所の

白鷺の草間から水や水線

此の所の名をいふ所ありり

此の所の名をいふ所ありり

此の所の名をいふ所ありり

此の所の名をいふ所ありり

閨怨

誰思以畫形能出此等情

六朝

嘗也連々帰るれ未だ守
掛餌乃蟻は流るるも思ふ外

火天

水まをる備もあらず思ふ外
撰う外車火工にあり川さるる

瑞雪あふ下をまわつてあはれ
塩もや水もく知れ川さるる
凌雪日乃の輪光るはつこい
以けぬくもあはれ流るる暑さ外
雪れ峯峽くもあはれ
印籠の薬も湯や雪は山
巡禮乃浴をたぬはしめはる
家客下りてあはれ川さるる

空をこゝろ義人乃日孔定印とぬ
格衣輝の龍のくあつらふ
蓮花あふらまをささげしむらさき

孔木林

あすふ我身ふあるれ格衣を
俣るははこゝろあふらまをささげしむらさき
日暮りやとふらの空をささげしむらさき
ささげしむらさき

お国さ義法

松風乃峰やゆるなる峰はたう

薩摩の松をささげしむらさき

将子死うらうらわらぬる松のれ

武佐勢

優こも羽の角を籠が拂ひさす

月小蝙蝠の画

誰やんる乃うらうら月の影

小槌のうらみとあはれ百にちかき目

古家よりさきまつて人形殿のこゝろ

福祿壽の次は細針をさすおれ引燈

のせ入お母のふし引人とのあふふふふ

あふふのあはれおれおれおれおれおれ

はらと挽くまゝ鬼灯もさぬのこゝろ

序の段

糸條へ枝をさすあはれおれおれおれ

秋部

初秋

と川秋や日影と揺れぬ草のあはれ

相のあはれを被りてあはれおれおれ

七夕

梶のあはれおれおれおれおれおれ

福寿あはれおれおれおれおれおれ

織あはれおれおれおれおれおれ

星合小西の行方 瓦屋

六道

老翁に語りし 嗚人 正の鐘

因光寺魚山禪師遷化

魂棚乃中に給はれ佛の

世は是まは 哀を至るる 哀を至る

送火

山の端に残るる 日るるや 大文字

去るぬと 出る婦と 疾く 踊るる

秋恋

残日故もせめて待たれ力の

一生の刻に 通るるや 控 園

直るる川 電るる 舟舟や 風の中

八朝の海を 定 古の歌

梅の影は 是 暮乃 意外

控控れ 芭蕉の 際 夕 中

芭蕉翁五十年忌

巨側乃權をみよれあつらふ

まな板

糸糸氣のはをれ切より花の影
溪川や菊の流るるを無に昇
吸吐れ持る煙るや麻能輝

月

曉つ夜草の履求ふ月見えり

人も多れそや月夜月の晴る

自よふ夜暗のよの月見外

名月や花のたまたま隠家も

名月や秋のうらむるあは面

名月ふ咲ひ合をり頂度の端

お市郎

名月やそよよのあはれを我儘

名月引都女や夕月東

見・高・不・向・空・回

月影よ尋入る中しりし夜

秋・陽

杖をうつく友を待てしやれぬ

山城乃谷中久しふ草の末

信濃の天待但官かたて

峰深く緋とるる位山

取長良猶不柳乃入日

為朝像

雲五毛はるかにありたさ

廿三夜

未滿ぬ月も余はやんて

控人之看経・進一後既月

かきり・色山・桂・身乃・額・際

志・懐

身は終も山川空山を行程あり

鬼竹画

能く川や末揃る存に成敷跡

山崎尤寂を憐む深ゆるに

業や一婦しつをよるの居

土佐の年栗ふ勢貴

深州や海子も付ぬ人こころ

冬部

時雨

山姥乃多きと居るや神時由

雞の尾よ入るはきしとくらけ非

るは尾ふ拂ひはなる時を非

軒の裏に臥す種屋の志く種非

志く方や 松下とふ 鷓 鷯

あふうらら此も掃きんりりたさる

麦耐

麦耐也五人の中より五人持

木枯

風中少くも物々馬乃年

ありし中松之削物能魚之海

仙鶴七面忌

埋之能産之残ア一光之乳

友送る多知乃影やる能ぬる

勢は田少遊不終小

意之近も同くぬ道个神は死

明必若士百多年忌

霜と月影之通屋す一十之目

画賛

五位鷺の尻まふ添や下北より

朱英子不説事にて

圃神をさるぬあそく意は風

すく掃や菴ふるは大階子

采女言

一とせ乃自柄ハ毒ぬ物わすれ
捨人からめ買ふおるし年終市
ふもつ共も忘てし手をとる瓜の皮
月と花れおがナ——の市
鴨水綿結やうき受れろ——の皮
巨魁くきり除おれ日校おる

一とわのれ胎内潜るし海おたり
稲妻乃隠きすまうはや自の産
こ——はや芽のこまうは風雨を
五車駄天の足弱つれこ——
し平もくや毒るる馬乃轡ふる芒履
半の争ん光の陰ふ娘るや母の
一自と千廻の橋をふるこ——

き即分

管分々佛堂拈まひきりあはる
尾拂くは詠乃鬼と連る川

年内立春

鞍馬前之花れ匂ひやうの月
燦取えみくらやう川るまき

老懐

雷木乃滅つてふ喜ちの

雑躰

北野

晴や梅よりかゝる一夜杏

月雪あ見えくは夜にまはらぬ
雪水のと年守る平日乃鳥

奥ふまきと正しし兼

は川るや松ふ静く金と山

犬の猪引くはつる終ふ

福引に何事もなし 家 留力

春情

聲もあて思ふ方より少襟外

巴人師の幼息我情をこ

若れ芽にうさき以その端のれ

西か多茂神光院弘法大師早言像

梅草に芥陰るん祖師の膳

清水坂



紅妻やゆくる久し花阿古屋株

半身遠摩屋園

川越乃尻を刀をわやくぬれ居

字の士画賛

春の日や止れ野介はる勢の春

多武山

空や雪と物あふ藤花門

むく雪もあふちりけ一期介

あまのついでに平たりのく

月夜とく。借り花を直鋪のちゆ

まゝの奉納

神所乃影也。籠子蟻屋浦

元師室

多き所所や。あまのついでに白のついで

窓鳥おまの目

唯あめ。ついでに解らん。雪は道

仁和寺

夕暮や。常々直にあらりけ

野村又三郎追悼

出羽中野。誰より。あまのついでに

あまのついでに。あまのついでに

月夜に。種や。難波津。浅香山

旭峯。あまのついでに

長蛇や。あまのついでに。あまのついでに

堀川や柿をこころむさうみ傘
山寺乃名帳まじり来る帳のたよ

謡師のたしむる盆の勢おほはる

月をこころむさうみ傘

梅画賛

旁に素帛や補之の硯まじり

賈友の蔭摩へ下るるを送りて

御代乃春鬼界の島も市多ん

葉櫻や志知名の都能遠縁
空根草身の新も原野川郭公

母は五十年小

五月のや空霞は枝まじり

寛る書まじり

入あし思はる咽ふ故屋のたよ

やとめあしあし會席を侍りて

後りあしあし川あしあし

敬函七回忌

うの花やさきくさくさの国も残さ

申、輔を悼む

くみ洲と清く常とあむけん

才あむきく人のあしこ...

一草かつこさきさくさあひ

子梅松を發行肺集、

菅草馬のふりすくさく人かき道

夏野修賢

山遊草わくくら伊りや山はらけ

はみくくや常とある人を思ひあす

壬戌のころのころ末阿老師の計り東
武より生きたあつこくさくさして

鋒園もおくくくえくく南を佛

追悼

あうれををむく教あふ紫苑うれ

くすくす守昨日ふさるるそのとき

壽老人川せりの圖

三河川みこ海をさやけきりて

布化布をさやけりて川岸の終

水州やうろれはまはれりる

はらわたりて居るは海流ありて

野蝶ははらわたりてあり

ふれりてはわたりてあり

長崎絵の蘭小

秋の暮に空を白くしきりて

四雜人一週忌

目をあやむをさやけりて

改者候ありて中村先生へ

及節よ深きなりてあり

秋田漆三島明神候地を

殊田頭乃穂波を居りて

ふれりてはわたりてあり

あぬふへ流くそ途吟

降るうらうらやまをれそふ入目うらや
博おはやかそ夜いはるあ月あを

唯あまの国新八百多あまのたて
全思ひ流く為別

子を神く川山流くわさる心そ流

空三眼神

室ふ宿か夏夜の時を思ひ出る

白峯

君やよと指けし僧も神そ月

丸名地留別吟

順風やし頭巾巾免と玄わつる

鍾馗装具

誰と見多うけく通るうへに拂

河津朕野角力画

めはうしや雪をかきこし竹乃る

いゝくは家生あやまの拂

真羽行脚を途の分

夜と似く月を吟入ル杖乃古

白河冥

白河好袖あき合す志られ共

此香伝

冬枯下りつれと人ふか川

依藤兄弟人像

里人ともへ多向よ寒き此取脂

実方ふ塚

ささや木杖ふるあけ馬は骨月

四騎中

物言れぬか〜さる所志られ哉

本名由清自水亭へ去る途に於て振れふ
其のふれハ

此影信やいろはに思もまめり

衣川

野れ羽やう原にそ戦く衣川

石のまきあて四朝ああふ

人並に臨馴衣あさるる来

小野の途中の時を記す

三つや〜神の〜

九十九橋

桑の〜や白の〜

遠谷窟

日蓮の〜

上太子

い〜太子の〜

江刺机墨菴の碑

候神を大木に臨や

日所留別

帷子乃袖を

南の

腕に病を

于血菜

魂糸ぬ〜

角趾の足あて大凡雷ふるあつ
るあれ艱難之際をいへり

志こりてん 唐花あはれ命か

漆の渡川さすお合甲と

川隈を便りよ略れ 熊津のれ

象酒

象酒乃冬は義人から喜酒あて

尼刹川北夷賊記す

小園や女乃 髪うととわらふ

七師暮浅草 而隨きふ語き

油しんれ ぶこ甲もとさきあり

安部川

柔れちも 氏の子も是て冬に

柴屋

物言ふそ木の葉くくろそ柴屋

孝之集校考
在後乃自

懷舊雨吟

月夜不語川
生世々々々
嘯山

壬生子本乃念佛
也西 賈友

推イナ在イナ肩車イナ何所イナかイナ也イナ

又 鶉イナ、
甲イナんイナ多イナくイナ人イナ

淡風れ勝吹拂ひ

松ふんふりとなつてゐる

的場より五竿の尋ねる奴らも

飯網ははる家中より

美の佐乃性子ちろく連と出て

空むねを詠しやアノやを

申すく空麻呂様ふ幣田の橋

鯉の鱗を壁ふ粘らうん

板敷に神さへひさし入から風

市文書や水并山様

由れあつて死後の國乃と心之議

武者修りしを野れ月を

雲の霜不禪乃風吹けおま

鉢唐の吹し梅も照るは

山中川も吉寺の都を道なきや

揺ふゆきを流徒をい百

つねに空をえぬ女く清川は
く屋引くは猿の園ふ解き入る
衣真引く猿の園ふ解き入る
系園。武士身持まわぬ
毒に。搦手形なるは月何れ
あ。うまあめしとて髪枝か
新艘か否無美く。くも梅らる
大肉の朋まれそはうふ録

印刻ま別をれも月の鏡みそ
持るま繫驢楸の屋破り起り
か。うまあめしとて髪枝か
志。りまねれまは屋小
嵯峨厚和清味陽成後福来
あ。うまあめしとて髪枝か
ま。うまあめしとて髪枝か
後中祝をむ行末は春

明治六年己丑三月

彫工

京油小路下立賣上

西尾重助

